

— 総合テーマ —

人はなぜ旅に出るのか

公開文化講座開催委員会委員長

明治大学法学部教授 金山 秋 男

今回、30回目を迎える本研究所主催の公開文化講座は、もとより、広く社会から智慧を学びつつ、大学側からも社会に還元するという、双方向的な開かれた場として設置されたものであり、毎回多彩な講師と熱心な聴講者との、熱気溢れる知的キャッチボールが展開されて参りました。

今回は、上記の標題のもと、人間の内奥に息づく旅への衝動をテーマに、4名の講師が様々な角度から硬軟自在に語るという企画であります。

昨今の便利で快適な交通手段や宿泊施設によって、先人たちが浴した真の旅は失われたかにみえますが、「舟の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす」と芭蕉も記しているように、人生そのものが旅であって、それは失われようがありません。だから、旅とは、空間を移動するだけでなく、旅人は時をさまよひ、過去を遡り、そこに堆積している人間のいとなみに分け入り、そこからまた自分に戻ってくる。つまり、私たちはみな自分に回帰する旅の途中にあり、来し方と行く末を分ける峠の上に立って、生きていることの不思議を垣間見る瞬間、そこにこそ旅の魅力、いや、魔力があるといつてよいでしょう。

なにも遠くへ行くことだけが旅ではありません。わが家を出て、ほんのわずか歩いただけでも、それは立派な「旅」でありえます。そのような気持ちで、本講座においていただき、私たちと道連れの旅を楽しんでいただきたいとご案内申し上げます。

「門を出れば我も行人秋のくれ」 蕪村

主 催 明治大学人文科学研究所

後 援 千代田区

日 時 10月6日、13日、20日、27日（毎金曜日）

午後6時30分～8時30分

会 場 明治大学駿河台校舎「リバティホール」(JR御茶ノ水駅下車徒歩5分)

聴 講 無 料 (申込手続不要)

第1回 10月6日(金)

いのちへの旅

明治大学法学部教授 金山秋男

司会：明治大学法学部教授 林 雅彦

森羅万象のすべてを聖なる言葉として、己のうちから流出する大宇宙の存在原理・大日如来、その光り輝く無形の大きい存在と、あるがままのわが身において合一すること。これが空海の感得した真言密教のエッセンスです。一遍によれば、「南無阿弥陀仏」は弥陀の命根に帰るということですが、これは浄土門のみならず、仏教のあらゆる宗門、いやあらゆる宗教の根底をなし、そのようないのちの本源への遡行は、一見悟りや救いとは対極にある、穢土のあり様を題材とする文学や芸能にも脈々と受け継がれております。

私たちは煩惱に汚れた日常を生きているだけでなく、その内奥にある本源のないのちをも生きており、それをそれぞれ仏とかキリストなどと呼んできたにすぎません。救いの原理を自己の外に求めるが、内に求めるかの違いはありますが、大切なのは本源の自分が必ずどこかにあり、そこへ帰還せざるを得ないというのが、人間の不思議さといえるでしょう。人間の想像力は、そのような本源性に向かって深海探査器を意識の内奥に下ろしていき、宇宙探査列車を銀河にむけて旅たさせるのです。

今回は宮澤賢治や夏目漱石などの近代作家から、芭蕉、近松、世阿弥、一遍、道元、親鸞を経て、密教、そして修験道や仏教渡来以前の原始信仰にまで遡り、そのすべての根底をなす人間の信仰信念の祖型を求めてみたいと思います。

第2回 10月13日(金)

旅はシロ、旅は石垣

俳優 原田 大二郎

司会：明治大学文学部教授 佐藤正紀

旅にやんで、夢は枯れ野を駆けめぐって松尾芭蕉は、月日を百代の过客と呼びました。人は永遠の旅人です。旅は、人間進化の象徴です。さまざまことで、人間は他の動物と別れて二足歩行になり、手に道具を持つようになり、やがては宇宙に進出していくまでになりました。旅は人間進化の始まりです。心臓の鼓動が停まると旅は終息していきますが、人間全体の歩みは決して留まりません。

十返舎一九は江戸中期に出て、生涯かけて大作『道中膝栗毛』を発表しましたが、これがどうやら元々農耕民族で旅が不得意だった日本人の、旅行熱をかき立てるきっかけになったようです。それまで、かなり命がけだった旅が「お伊勢参り」の御師の活躍と相まって、日本人の身近な行事になっていったのです。人はなぜ、旅をするのか。

旅に飽いて、人は城を持つようになるように思えます。しかし武田信玄は、周囲の人こそが、自分の城だと言い切りました。

あれこれ、旅について一緒に考えることができれば、これに過ぎる喜びはありません。

第3回 10月20日(金)

内面への旅—遍歴する精神

明治大学文学部教授 立野正裕

司会：明治大学法学部教授 金山秋男

標記の主題を考えるにあたり、生涯にわたって「内面」を探求し続けた20世紀ドイツの大詩人リルケに、われわれの思いを馳せてみることにしましょう。リルケは、現代という「内面」を喪失した「乏しき時代」にあって、旅に生き旅に死んだ典型的な遍歴の詩人でありました。スイスのローヌ河溪谷でその代表作『ドウィノの悲歌』は書かれたのですが、同地でバラの棘に刺され客死しました。墓は今もそこにあります。墓碑銘には、「おお、バラよ、清らかな矛盾よ。」と刻まれました。

バラが「矛盾」の象徴であるならば、それは同時に生と死、または死と再生といった矛盾を生き抜く力をも象徴しているはずでありましょう。まさにそういう力を求めて遍歴しつつ、リルケは旅の生涯を終わった詩人であると言えるべきかもしれません。

その墓を目ざし、ローヌの溪谷の道を辿って行く旅もまた、われわれにとって、なにほどこか「内面の旅」でなければならないはずです。それは、密生したバラの茂みに分け入るような様相をあるいは呈するかもしれませんが、どうかしばらくのあいだお付き合い願いたく存じます。

第4回 10月27日(金)

終わりにき旅を生きること —チャトウィンとル・クレジオ—

明治大学理工学部教授 管 啓次郎

司会：明治大学理工学部教授 浜口 稔

20世紀の後半、旅はたしかに変質した。人々はよく確立された交通網を利用し、国際政治＝経済のからくりのすきまを縫うようにして、地球のすべての片隅を、自分の幻想にしたがって訪れることができるようになった。けれどもそのとき改めて、「何を求めて旅をするのか」という古来の問いが浮上する。ここではそんな20世紀的旅人の典型として、二人の作家を論じる。イギリスのブルース・チャトウィン(1940-89)、そしてフランスのJ・M・G・ル・クレジオ(1940-)だ。美術品ディーラーの職を投げ打って旅に出て、パタゴニア、西アフリカ、オーストラリア内陸部をさまよったチャトウィン。パナマの密林でインディオと暮らし、その後も南北アメリカやアフリカの土着の人々の精神世界に強い親和性をしめしながら、第一線で創作を続けてきたル・クレジオ。アフリカ大陸で発生した人類の認識と移住の冒険を、みずからの足跡においてたどり直す二人の旅の意味を、ここでは考えてみたい。